

保育園給食関係者のみなさま

若松保育園の年中クラスに娘がお世話になっております、と申します。
若松保育園の給食が「卵・乳・小麦」不使用の給食に変わってから1年がたちました。
食物アレルギーの子供をもつ親として感じた事をお伝えしたいと思い、突然ではあります
がお手紙させていただきました。

娘はH26年10月より若松保育園(当時2歳児クラスに転園)を利用させていただいています。
入園前より担任の保育士の先生および管理栄養士の先生には十分な面談・相談をしてい
ただきました。私どもより希望しました、食物アレルギー対応のマヨネーズドレッシングの
使用やパンの持ち込みにも対応してくださいました。さらに、医師の指示でエビペンの携帯
が決まった時は、一緒に病院の講義に参加した上、その後に園で他の先生とも勉強会を開催
したとの報告までして下さりました。
入園から現在に至るまで、園での食物アレルギーの対応は、十分かつ丁寧な対応をして下さ
っていると感謝しております。

娘は生後2カ月に食物アレルギーと診断されました。親として子供の食事には、体の健全な
成長だけでなく、食事の楽しさや大切さ、自身の食物アレルギーを正しく理解するように、
家庭で試行錯誤しながら食育に取り組んできました。
しかし、成長するにつれ、家族と手作りの食事を楽しむ以外にも、市販の食品や外食、家族
以外の人と一緒に食事を楽しみたいという娘の気持ちも大きくなり、そこで直面する難し
さも増えてきました。
3歳までに改善する子も多いなか、成長してもなお除去が必要な事で、幼いながらも社会で
の制限を実感するようになりました。定期的な採血や食物負荷試験等でのアレルギー症状
の経験から、食物アレルギーの怖さも理解するようになりました。

保育園でも、幼児クラスになると、年長・年中・年少の大人数で給食をとるだけでなく、配
食も子供たちで担当することになりました。もちろん、去年までは、誤食のリスクから娘は
その輪(みんなと一緒に給食係から給食をうけとる)に参加することができませんでした。
その対応も事前に説明をいただき、事故防止の点において正しいと理解していました。
その上で、実際に保育参観で初めてその光景を目の当たりにしました。給食の準備が始まる
と先生から名前を呼ばれ、一人だけ給食係の後ろの壁でカーテンに埋もれるようにして立
って見ている娘の表情に衝撃をうけました。食事を前にして笑顔のないその表情。これが娘
にとって毎日の事なのかと切ない気持ちになりました。

今年度の給食の食物アレルギーの対応は、アレルゲンの除去というバリアフリーの対応か

ら、『みんなで同じものを共有できる』ユニバーサルデザインの対応に変わりました。一年前、この知らせをいただいた時は感動と感謝の気持ちでいっぱいになりました。娘に給食が変わることを伝えると、娘の目から涙がこぼれ、私も一緒に泣いてしまったのを覚えています。当時4歳の娘のやはり幼いながらに言葉にならない気持ちを抱えていたんだなと思いました。

今年度の給食は、娘もお友達と一緒に給食を取りに行き、全く同じものを食べるという事を初めて体験する事はできました。お友達と同じように、給食を減らしたり、おかわりしたりという事ですら、キラキラした笑顔で報告してくれます。

体だけでなく心もダイナミックに成長するこの幼児期に、自分の所属するコミュニティから時に隔離されるというのは、つらい体験だったと思います。保護者としても、いくらアレルギー除去の対応をしても、事故は起こり得る事で、自分の手を離れたところで食事をすることは常に不安でした。さらに、たくさんの園児をみながら誤食に配慮する保育士の先生や誤配や混入に注意する調理スタッフも大変であったと思います。

現在、社会的にも食物アレルギーの子供は多く、私たち以外にも不安を感じながらも保育園に預けている保護者の方もいらっしゃると思います。少しさみしい思いもしながら給食を食べている子供もいると思います。

多くの園児に対応している現場で、既存のやり方を大きく変え、新しいやり方を取り入れるようとする時は抵抗感や反対する意見もあるかと思います。そうした中、いち早くユニバーサルデザインの給食提供を開始した事は、専門職として熱意や勉強があつてこそできる、優しさや思いやりにあふれた素晴らしい対応であると思えました。

食物アレルギーの研究も近年は特に進んできており、治療法や家庭での取り組み方も変わってきています。食物アレルギーの社会的認知も広がってきていると感じます。

今後、若松保育園のようなユニバーサルデザインの給食提供の取り組みが一つでも多くの園で行われ、職員・園児・保護者が安心して、楽しめるような給食が広がっていくことを願っています。

追記

定期的に採血や経口負荷試験で、痛みやアレルギー症状(強烈的な腹痛や喘息症状)を経験し、自身の食物アレルギーがなかなか改善しないことや、アレルギー症状の怖さは十分認識されています。治癒し終了する目途がないなか、採血や負荷試験の続けてなくてはならない事は本当なら嫌だと言いたいのだと思います。しかし、保育園ではない所でも、お友達と一緒に色々なものを食べられるようになりたいと、前向きに治療に取り組めるようになりました。これもユニバーサルデザインの給食を経験できたからこそだと思います。

平成29年3月28日